

平和学の視点から考える

ロシア・ウクライナ紛争

君島東彦

きみじま あきひこ
立命館大学国際関係学部教授
専門は憲法学、平和学
元日本平和学会会長

一 平和学の視点

1 平和学という方法

私はロシア政治やヨーロッパ政治の専門家ではありません。平和学という立場から考えた時にどういう捉え方ができるのかということをお話しできればと思っています。平和学というのは英語で peace studies あるいは peace research と言いますが、平和学あるいは平和研究

と訳しています。では平和学とは何か？ よく「戦争の原因と平和の条件を探求する学問」と言われます。これはよくできた定義だと思います。

私自身つねに立ち返るのは、一八世紀ドイツの哲学者イマヌエル・カントです。彼が晩年に書いた『永遠平和のために』という小さな本があります。これは二百年以上経つ本ですけれども、いまだに我々が平和について考えるときの原点になっていると思います。カントはこの本の第一章の最初の方で「平和とはすべての敵意が終わ

ること」と言っています。私なりにこれを解釈すると、「国家間の憎悪の連鎖を終わらせること」が平和だということだと思います。私たちはその課題を追求しています。

2 平和学の特徴

平和学というのはいろいろな学問分野の共同作業ですが、おそらく国際政治学あるいは国際関係論が一番近い学問だろうと思います。では国際政治学や国際関係論とどこが違うのか。それは、敵対ではなく信頼醸成、排除ではなく包摂、勢力均衡ではなく包括的制度化、軍拡ではなく軍縮、戦争準備ではなく戦争予防を重視することです。また平和学の一つの特徴は、紛争の根源にある構造を把握して、その構造から紛争の克服を考えることです。そして平和学の場合、戦争を予防する、平和をつくる主体として、国家、国際機構、それから市民社会を想定しています。この市民社会は国内だけでなく、越境的なグローバルな市民社会です。この三者の関係を重視し、国家だけを見ないということが平和学の特徴です。

それからもう一つ。何年か前に大学の同僚の哲学者に「政治とは何ですか」と聞いたことがあります。その人は、「政治とは敵と味方を区別することだ」と言う。しかしそうなる平和学とは違う。平和学は敵と対話する

わけです。敵の声を聴くということが政治学と違うところだと思います。これは敵の主張を認めることとは違いますが、決して敵の主張を認めることではないが、声を聴くということだと思います。

3 平和学者たち——いま注目される人々

ここで三人の平和研究者を紹介しておきます。一人はフィンランドの国際政治学者ヘイッキ・パトマキです。フィンランドとスウェーデンがNATOに加盟申請し注目されていますが、最近彼とやりとりをしていて、フィンランドの人たちが何を考えているかを彼から知ることができました。もう一人は、南京大学の劉成(リュウ・チェン)です。彼はもともと歴史学者ですが、中国で平和学を定着させ発展させようと精力的に活動している人です。日本平和学会は、彼らと二〇一五年から日中平和学対話をやってきました。それからもう一人は、ユーリ・シエリアジェンコで、ウクライナ人です。キーウにあるクローク大学の教員で、絶対平和主義者としてウクライナ戦争を批判しています。ロシアも批判しています。ウクライナに対しては批判的ですが、私はシエリアジェンコと何度かやりとりをしましたので、彼の考えを後で紹介したいと思います。